

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2006－2008  
 課題番号：18401007  
 研究課題名（和文） 地域研究における人・モノ・言葉のネットワーク：アジアにおける事例研究を通して  
 研究課題名（英文） Heterogeneous Networks of Human, Nonhuman and Language in Area Studies: Case Studies in Asia  
 研究代表者  
 足立 明（ADACHI AKIRA）  
 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授  
 研究者番号：90212513

## 研究成果の概要：

本研究は、出来事や事象というものが社会や文化、生態などに分かれて存在しないという事実から出発し、文化や社会、生態といった特定のフィルターをとおさず、領域横断的な地域研究を行う可能性を探ってきた。とくに、①メタ方法論としてアクター・ネットワーク論に着目し、その関連分野の理論的、方法論的検討、②各自の資料・調査経験のアクター・ネットワーク論的な組み替え、③補足的な海外調査を行った。その研究成果は、以下で言及する事例研究と理論的・方法論的考察である。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2007 年度	3,600,000	1,080,000	4,680,000
2008 年度	3,300,000	990,000	4,290,000
総計	10,400,000	3,120,000	13,520,000

## 研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：人文学 A・地域研究

キーワード： ネットワーク 宗教の物質性 農業における知識

## 1. 研究開始当初の背景

地域研究は、特定の地域における出来事や事象を学際的に研究し、出来事や事象の具体的な現れ様をとおして、その地域性を描きだすことを主な目的の 1 つとしてきた。しかし、これまでの地域研究の多くは、研究者のディシプリンに制約され、文化や社会、政治、経済、生態といった切り口で一面的に地域を把握してきたにすぎない。これに対して、本研究では、そもそも出来事や事象というものが社会や文化、生態などに分かれて存在しないという事実から出発した。そして、文化や社会、生態といった特定のフィルターをとおさ

ず、領域横断的な地域研究を行う可能性を探ろうとした。

## 2. 研究の目的

本研究では、主な研究対象を以下の 2 つとする。1 つは、宗教における物質性であり、もう 1 つは、農業における知識についてである。この 2 つを選択した理由は、宗教の研究が言葉(記号・象徴・意味)という切り口から特権的に研究されてきており、そこではモノが背後に退き、姿を消してしまっているからである。また、それとは逆に、農業の研究においては、モノ(生態・技術・経済)という切

り口を中心に研究されてきており、そこに介在する知識(暗黙知を含む)は背後にとどめられたままであるからである。

ここでは、このような宗教と農業を、アクター・ネットワーク論的な立場から研究するとともに、地域研究におけるアクター・ネットワーク論の可能性を検討しようとした。以下が、本研究で明らかにしようとした点である。

#### (1) 宗教における物質性

多神教的な仏教とヒンドゥー教、そして一神教で偶像崇拜を禁じているイスラームをとりあげ、そこに関わるさまざまな人や教典(テキスト)と、儀礼的事物、寺院、都市構造といったモノなどとの関わりを記述する。そして、これらの宗教が信者の心や教典にのみならず、さまざまなモノの中に分散(distributed)されて存在し、宗教的意味とモノが融合している様態を描きだす。また、このようなヒンドゥー世界とイスラーム世界における宗教の物質性をめぐる事例を比較することで、宗教をめぐる人、モノ、言葉の絡まり合いにおける地域性を明らかにする。

#### (2) 農業における知識

南アジアにおける溜池灌漑農業(スリランカ)、河川灌漑農業(バングラデシュ)、棚田農業(ネパール)をとりあげ、農業の実践的知識が農書や農民の身体にのみあるのではなく、道具や耕地、農業景観、空気、臭い、気温などとの関わりで存在し、農業の知識がそれら全体の中に分散している様を記述する。そして、農業実践におけるモノと知識が融合している様態をダイナミックに分析しようとする。さらに、異なった農業生態における知識に関する事例を比較することで、農業をめぐる人、モノ、言葉の絡まり様の地域性を明らかにしたい。

#### (3) 地域研究におけるアクター・ネットワーク論の可能性

上記のような宗教と農業に関するアクター・ネットワーク論的な研究をとおして、地域研究におけるアクター・ネットワーク論的な展開の可能性を個別・具体的に明らかにする。それと同時に、アクター・ネットワーク論的な方法の理論的、技術的問題点も明らかにし、今後の研究展望を行う。

### 3. 研究の方法

本研究における研究分担者は、アジアにおける各自の研究対象に関して、長期間研究を続けてきており、十分な資料と調査経験を蓄積してきている。しかし、研究分担者の多くは、アクター・ネットワーク論的な方法に必ずしも精通しているわけではない。そのため、本研究では、3年間の研究期間をとおして、以下のような3つの作業を行おうとした。

(1) 国内の研究会において、既存の資料のアクター・ネットワーク論的な組み替えを行う。  
(2) (1)における不十分な点を、現地調査を通して補足する。

(3) 各研究者の事例研究をつき合わせ、人、モノ、言葉の絡み合い方に関する地域間比較を行い、アクター・ネットワーク論の地域研究的な展開を検討する。

### 4. 研究成果

ここでは研究成果を、個別の事例研究と理論的・方法論的検討の2つに分けて示したい。

#### (1) 事例研究

以下のような事例研究を行った。ただし方法論のところでも言及したが、今回の研究は、既存の資料を組み替え、現地調査は補足的に行ったため、必ずしも十分な資料をもとに行うことができなかった点が残念である。

##### ① 宗教における物質性

ヒンドゥー・仏教的な宗教実践は、さまざまな宗教的事物を媒介として行われてきた。そのような過程をよりモノに強調点をおいて調査を行った。また、これらのヒンドゥー・仏教実践とはと一線を画すように、イスラームの宗教実践はその非物質性を強調されてきた感がある。しかし、イスラーム巡礼(カーヴァ神殿など)をめぐるさまざまな実践などの研究を通して、モノ(石、場所)が巡礼者や言葉とのネットワーク形成を通じてさまざまな宗教実践と宗教性の生成に重要な役割を果たすことが議論された。

##### ② 農業における知識

南アジアの農業における近代化過程のなかで、在来の農機具や農業技術と、新しい農業機械と農業技術が、選択的・試行錯誤的に組み替えられ、器用仕事(ブリコラージュ)としての在地の農業が立ち現れる過程を調査した。そしてそこにおける知識は、マニュアルなどの文字で表現されない身体と在地にあるさまざまな事物を媒介に生みだされ、さらに同時に、その身体と在地に分散して記憶されていることが論じられた。

#### (2) 理論的・方法論的検討

3年間の共同研究で議論の中心になったのは、人とモノの媒介における言葉・表象・意味といった概念の位置づけである。現実の事例研究では、言葉、表象、意味といった概念はきわめて状況的に、そして明確な定義をせずに使っているし、また使わざるを得ない。しかしそれら概念間の関係となると、きわめて難しい問題になる。おそらく、これまでの学問を総出にしても決着はつかない性質のものであろう。

本来、アクター・ネットワーク論は、人とモノを対称的に扱おうとする。そのため、モノの属性でない意図や意味という概念を用いないし、人の主体を前提とする表象という

概念も極力避ける。つまり、デカルト＝カント的な「モノとは何か」ではなく、プラグマティスト的に「モノが何を(人との関わりで)行うか、作用するか」を問う。

このような立場は、技術と社会の問題を扱う際に、人間中心主義を廃し、より全体的な関係を理解することができる。しかし、それは同時に、人の側が(モノとの供働で)経験する壁や深みを犠牲にしてしまう。そのため、宗教的な実践や農業実践を、その深みを伴って記述することが困難になる。

そこで、このような問題に対して、さまざまな理論的・方法論的な工夫が必要となる。これまで検討してきた工夫の1つは、モノを、物質—記号ととらえ、常に何らかの資材性をもつ記号ととらえるという戦略である。そして、人との関わりで生まれるモノの物理的作用と記号的作用の連鎖を歴史的に、民族誌的に記述していくのである。そして、その連鎖に関与する器用仕事の、アブダクション的、マイクロスリップ的な過程を理論化していくことである。

もちろん、このような「工夫」は簡単なものではなく、今回の共同研究で、その輪郭をおぼろげながら認識したというにとどまっている。しかし、今後このような工夫を事例研究と理論的考察を通してすすめることで、より、人・モノ・言葉のネットワークの動態が明確になり、総合的地域研究の理論的・方法論的な展開に道が開けると思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 小杉 泰 2009 「イスラーム文明の形成とその固有性をめぐって」『比較文明』24: 21-47. (査読なし)
- ② 安藤和雄 2008 「モンパ族の犁農耕と農具に関する見聞記: 2007年9月14-18日インド国アルナチャールプラデシュ州 West Kameng, Tawang 県」『ヒマラヤ学誌』9: 84-111. (査読なし)
- ③ 内山田康 2008 「芸術作品の仕事: ジェルの反美学的アブダクションと、デュシャンの分配されたパーソン」『文化人類学』73(2): 158-177. (査読有り)
- ④ 若生謙二 2007 「アメリカ人の動物観とウィルダネス」『ヒトと動物の関係学会誌』20: 20-28. (査読なし)
- ⑤ 小杉 泰 2007 「イスラーム世界における文理融合論: 『宗教と科学』の関係をめぐる考察」『イスラーム世界研究』1(2): 123-147. (査読有り)
- ⑥ 若生謙二 2006 「ハハーの起源とその変容

過程について」『ランドスケープ研究』69(5): 349-354. (査読有り)

[学会発表] (計 3 件)

- ① 足立 明 「人とモノの媒介」(分科会『もの、ひと、ことばのネクサス』、日本文化人類学会第42回研究大会、京都大学、2008年5月31日)
- ② 内山田康 「芸術作品は、視覚言語?」(分科会『もの、ひと、ことばのネクサス』、日本文化人類学会第42回研究大会、京都大学、2008年5月31日)
- ③ FUJIKURA, Tatsuro "Of Lands and Red Cards: The Bonded Laborers' Freedom Movement and the Maoist People's War in Nepal", American Anthropological Association Annual Meeting, San Francisco, 19 November 2008.

[図書] (計 4 件)

- ① 足立 明 2009 「人とモノのネットワーク—モノを取りもどすこと」田中雅一編『フェティシズム論の系譜と展望』、京都大学学術出版会、175-193頁、(総ページ数379頁)
- ② 足立 明 2009 「人とモノのネットワーク—ブラックボックス・法隆寺・共有」加瀬澤雅人・田辺明生編『技術と社会のネットワーク—研究課題と展望—』、58-67頁、(総ページ数85頁)
- ③ 田辺明生 2008 「民主主義—ばらばらで一緒に生きるために」春日直樹編『人類学で世界をみる—医療・生活・政治・経済』ミネルヴァ書房 205-226頁、(総ページ数303頁)
- ④ 内山田康 2008 「インドモダンのアレゴリーと瞑想する卵」川那部保明編『ノイズとダイアログの共同体』筑波大学出版会、97-136頁、(総ページ数542頁)

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

足立 明 (ADACHI AKIRA)

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授  
90212513

(2) 研究分担者

小杉 泰 (KOSUGI YASUSHI)

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授  
50170254

東長 靖 (TONAGA YASUSHI)

京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・

准教授  
70217462

藤倉 達郎 (HUJIKURA TATSURO)  
京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・  
准教授  
80419449

田辺 明生 (TANABE AKIO)  
京都大学人文科学研究所・准教授  
30262215

安藤 和雄 (ANDO AKAZUO)  
京都大学東南アジア研究所・准教授  
20283658

加藤 剛 (KATO TSUYOSHI)  
龍谷大学社会学部・教授  
60127066

内山田 康 (UTIYAMADA YASUSHI)  
筑波大学人文社会科学研究科・教授  
50344841

若生 謙二 (WAKO KENJI)  
大阪芸術大学芸術学部・教授  
40268222

(3)連携研究者  
なし